DOI 10.18995/24344710.11.59

論　文（査読付）

映画制作ワークショップの教育的機能についての考察

石垣尚志

Examining educational functions of a filmmaking workshop

ISHIGAKI Takashi

Abstract

This paper looks at a filmmaking workshop in Sapporo City, Hokkaido and examines the educational functions of filmmaking workshops. This paper presents the result of an interview survey and the result of a questionnaire survey, which was conducted on participants of a filmmaking workshop.

Based on survey results, this paper examines the educational functions of filmmaking workshops. A filmmaking workshop hardly affect creative behavior, but can encourage interest in creation. It can provide collaborative experience and create time and place for communication. Finally, it can encourage interest in local community and neighborhood.

1．はじめに

本稿は、子どもを対象とする映画制作ワークショップの事例研究である。具体的には、北海道札幌市で行われていたワークショップを事例として取り上げ、ワークショップの目的、活動の内容、地域社会との関係について考察する。考察の材料となるデータは、各種の文献資料に加えて、主にワークショップを実施する NPO 代表へのインタビュー、そしてワークショップ参加者と保護者を対象としたアンケート調査である（石垣、2016）。

子どもを対象とする「映画教育」は、①鑑賞を中心としたプログラムである「鑑賞型」（映画鑑賞会、映画上映ワークショップ）と②体験学習（工作など）を中心としたプログラムである「表現型」（工作、映画制作ワークショップ）に大別することができ、そして、映画による情操教育、メディアリテラシー教育、将来の観客の創造、共同作業によるコミュニケーション能力の育成などが目的・意義とされている（土田編 2014、国際文化交流推進協会 2007）。札幌市の

「子ども映画制作ワークショップ」も共通した目的を持っている。本稿では、このような目的に対して、実際にワークショップのなかでどのような活動が行われているのかを考察する。

調査の結果からは「映画による情操教育」、「メディアリテラシー教育」、「将来の観客の創造」については把握することができなかった。これらの目的については継続的な調査が必要になると思われる。他方で、ワークショップによる創作・鑑賞行動への影響は見られなかったが、創作や共同作業への関心が生み出されていた。さらに、ワークショップの中で「共同作業によるコミュニケーション」が積極的に行われ、参加者はそのことに肯定的な考えを持っていることがわかった。

札幌市のワークショップでは「地域の人たちと一緒に映画をつくる」ことが目的のひとつとされた。そもそも映画制作は多くの人たちが関わる共同作業として行われるが、札幌市のワークショップでは、他の参加者に加えて地域の人びとと関わりながら映画が制作された。ワークショップによって地域の人びととのコミュニケーションが行われ、そして「地域への関心」が生み出されていることがわかった。

以下、2 章では子どもを対象とする「映画教育」の概要をまとめ、3 章において本稿が事例として取り上げる札幌市の「子ども映画制作ワークショップ」の内容を紹介する。そして、4 章でワークショップ参加経験者を対象としたアンケート調査の結果を考察し、5 章では映画制作ワークショップの可能性について検討していく。

2．子どもを対象とする「映画教育」について

子どもを対象とする「映画教育」は、鑑賞を中心とする「鑑賞型」と工作や映画制作を中心とする「表現型」に大別されている（土田編、2014、p.48）[1]。子どもを対象とする映画教育事業の事例をまとめた報告書『「こどもと映画」プログラムの現在』では 18 の事例が取り上げられ、そのうち映画鑑賞を中心とするプログラムは 8 件、鑑賞と表現の混合型が 4 件、表現型が 5 件である（表 1）。

国際文化交流推進協会（2007）の報告書は、映画館や公共文化施設が行なっている取り組みの一部を紹介している。これらの取り組み以外にも、国レベルでは文化庁によって「子どもへの日本映画の普及」事業（子どもの映画鑑賞普及事業）が 2004 年度から 2009 年度まで行われ、主に教育委員会と文化庁との共催で、小中学生を対象とした映画鑑賞会が実施された。さらに、鑑賞型は全国の学校や図書館などの文化施設自などで多数実施され、全体数を把握することは難しいほどだと思われる。鑑賞型では、ただ映画を鑑賞するだけではなく、鑑賞前の映画の解説、鑑賞後のグループディスカッションと発表など、ワークショップ型のさまざまな取り組みが行われている。また、鑑賞型のなかには上映会を企画する「上映ワークショップ」の取り組みも含まれる。

表現型は、パラパラ漫画やゾーエトロープ（回転のぞき絵）などの工作を通して「絵が動く」ことを体験する取り組みと [2]、プロの映画・映像制作者とともに短編の映画を制作する取り組

みに分けられる。映画を制作するワークショップのうち「こども映画教室」(金沢市)、「ジュニア映像制作ワークショップ」(川崎市)、「子ども映画制作ワークショップ」(札幌市)が代表的な取り組みである。

表1　子どもを対象とする映画教育事業の主な事例[3]

事業の類型	実施主体	
鑑賞型	ちいさなひとのえいががっこう	自主サークル
	ユーロスペース	映画館
	伊勢進富座	映画館
	東京国立近代美術館フィルムセンター	映画専門施設
	福岡市総合図書館	映画専門施設
	広島市映像文化ライブラリー	映画専門施設
	群馬県の映像教育事業	学校
	麻布学園中学校・高等学校図書館	学校
混合型	金沢コミュニティシネマ推進委員会(シネモンド)	映画館
	NPO法人たかさきコミュニティシネマ	NPO
	高知県立美術館	公共文化施設
	NPO法人こうちコミュニティシネマ	NPO
	山口情報芸術センター	公共文化施設
表現型	NPO法人北海道コミュニティシネマ・札幌(シアターキノ)	NPO／映画館
	せんだいメディアテーク	公共文化施設
	パルテノン多摩	公共文化施設
	川崎市市民ミュージアム／KAWASAKIしんゆり映画祭	公共文化施設
	彩の国ビジュアルプラザ映像ミュージアム(SKIPシティ)	公共文化施設

備考：国際文化交流推進協会（2007、pp.10-11）をもとに筆者が作成した。

表１の「表現型」に分類されている「川崎市市民ミュージアム／KAWASAKI しんゆり映画祭」は 2000 年から「ジュニア映像制作ワークショップ」を行なっている。中学生が対象であり、活動期間は 6 月～8 月で、夏休みの時期に撮影・編集が行われ、10～11 月に開催される「KAWASAKI しんゆり映画祭」で作品が上映されてきた。2019 年からは活動期間が短くなり（2～6 日間)、短編映像やコマ撮りアニメーションの制作が行われているが、プロの制作者の指導を受けて協働で制作するという取り組みの内容は変わっていない。[4]

表 1 の「混合型」にある金沢コミュニティシネマ推進委員会は 2004 年から「こども映画教室」を行なっている[5]。対象は小学生で、3 日間で、プロの映画制作者の指導を受けて（毎年、プロの映画監督が特別講師となり）[6]、脚本づくり・ロケハン・撮影・編集・宣伝・上映までを体験する。2019 年に「一般社団法人こども映画教室」として法人化し、金沢市だけではなく、全国各地の文化施設や映画館と協働して事業を行なっている[7]。2017 年からは東京国際映画祭と共同で、中学生を対象としたワークショップ（「TIFF ティーンズ映画教室」）を実施している[8]。「こども映画教室」のウェブサイトには「こども映画教室のミッション」として以下のように述べられている。

私たちは「こどもと映画のアカルイミライ」を目指すことをミッションに、映画・映像に関するワークショップの企画・実施、学校などへのワークショップのコーディネートや、シンポジウムの開催などを行います。／2004 年に金沢で始まった「こども映画教室

®」(金沢コミュニティシネマ等主催)では、毎年映画の仕組みをわかりやすく体験するワークショップやさまざまな名画の鑑賞などを通し、次世代の文化を担う創造力豊かな子どもたちの育成をはかってきました。／子どもたちは正解のない映画づくりや映画鑑賞後のお話会などを通じて、自分とは違う価値観を知ったり、友達ととことん話し合ったり、協力して何かを作り上げる体験をします。そのことは子どもたちの想像・創造性を引き出し、コミュニケーション力を高め、自由な発想を生み出します。そして、成長し変化を遂げる子どもたちの姿を真剣に見つめるうちに、大人たちもまた感化され、変化していきます。(下線は筆者による加筆)

上述したように、子どもを対象とする映画教育では、映画による情操教育、メディアリテラシー教育、将来の観客の創造、共同作業によるコミュニケーション能力の育成などが目的とされている。「こども映画教室」は、他の参加者とコミュニケーションを行うこと、他の参加者の考えに触れること、自分とは違う視点に気づくことという「共同作業の体験」を重視しているといえる。土田編（2014、pp.13～14）では、他者との共同作業である映画制作は「他人とともに考えることの実践」であり「他人との対話」が必要となり、それゆえ「表現型」(映画制作)の映画教育には、「コミュニケーション力の養成」という意義や目的があると述べられている。

これら二つの取り組みにおいて、子どもたちはプロの制作者の指導を受けながら主体的に参加して、共同で映画を制作している。これに加えて、本稿で取り上げる札幌市の「こども映画制作ワークショップ」には、「地域の人びとと共同で制作する」という特徴がある。「プロの制作者／子ども」だけではなく「プロの制作者／子ども／地域の人びと」という関係性がある。

以上のことを踏まえて、以下では、「共同作業の体験」に注目して、札幌市の「こども映画制作ワークショップ」の取り組みを考察していく。

3．札幌市「子ども映画制作ワークショップ」

3-1.　ワークショップの経緯

NPO 法人北海道コミュニティシネマ・札幌による「子ども映画制作ワークショップ」(以下、制作 WS）は 2005 年から行われ、これまで短編 6 作品、劇場公開の長編 1 作品が制作されている。2005 年、2008～2011 年は札幌市の助成を受けたが、2012 年・2013 年は企業協賛と市民サポーターの寄付を活動資金とした。中学生（1・2 年生）が対象であり、平均して 20 数名が参加した。[9]

表2　子ども映画制作ワークショップの経緯

2005年	イサム・ノグチ設計のモエレ沼公園が完成。公園完成を記念してモエレ沼公園を舞台に中学生を対象とした短編映画制作WSを行い『僕らの魔法学校』（16分）を製作。（モエレ沼公園グランドオープン関連事業の札幌市の予算）
2008年	札幌芸術の森で『PAGE ONE』（24分）を製作。中学生WSは2008～2011年度まで「子供の映像製作体験事業」（札幌市文化部の予算）として実施。
2009年	大通公園で『夏の自由な研究』（25分）を製作。
2010年	狸小路商店街で『見えなかった幸せ』（25分）を製作。商店街との連携が一部あり。
2011年	発寒商店街で『命の樹』（29分）を製作。地域コミュニティとの連携で製作を行う。ゆうばり国際ファンタスティック映画祭で上映。
2012年	円山公園で『僕らの興味期限切れの夏』（34分）を製作。円山商店街との連携あり。市の助成がなくなり、企業協賛・市民サポーターにより資金調達。
2013年	劇場公開長編『茜色クラリネット』（81分）製作。琴似地区の人々（商店街、まちづくり団体）と連携。

備考：インタビュー調査をもとに筆者が作成した。

3-2.　ワークショップの進め方

映画の脚本は公募で募集する。中学生は、役者、演出、撮影、録音、衣装・小道具・音楽のいずれかの役割で参加する。それぞれの役割に「指導」役（大人スタッフ）として、札幌市在住の映像制作者（NPO 法人北海道コミュニティシネマ・札幌の代表も含む）がつく。

平均的なスケジュールは次の通りである。4 月に参加者と脚本を募集する。脚本は一般公募で募集を行い、中学生参加者は札幌市教育委員会を通して市内全中学校にチラシを配布して募集する。5 月に参加者の役割を決める。演出チームと大人スタッフによって役者のオーディションを行う。また、演出チームと大人スタッフによる脚本選び、そして脚本家を含めた脚本の手直しを行う。6～7 月の週末で役者チームの演技指導、技術チームへの技術指導、撮影地選びを行い、8 月の夏休みの期間に撮影を行う。大人スタッフは「教える」というよりも「新人へアドバイスする」という姿勢で取り組む。「教育というより、制作にスタッフとして参加できる技術を教える。議論や話し合いは子どもたちに任せる」という。参加する中学生は 6～7 月の準備期間で技術を身につけ、撮影現場での自分の役割を理解し、「制作スタッフ」として映画制作に参加する。

制作 WS は中学生が他者とコミュニケーションを行い、主体的に参加する（「制作スタッフ」として参加する）ことを重視している。

脚本選びでは、大人スタッフが選定した 4～5 本の脚本を読み、中学生たちがどの脚本でやりたいのかを話し合って決定する[10]。その後は演出チームと脚本家（一般公募で脚本を応募した市民）で話し合って脚本の手直しを行う。さらに、役者オーディションも演出チームの中学生と大人スタッフで行い、映画タイトルは監督が決める。撮影前の準備期間では、それぞれの

チームのなかで参加者が自分たちで考え話し合っていたという。例えば、撮影・録音チームはロケハンをしながら「どんな撮り方ができるか」「どうやって音を拾うか」などアイデアを出し合っていたという。

3-3. 地域コミュニティとの関係

主に札幌市内でロケ撮影を行うため、当初から撮影場所の地域コミュニティとの関わりはあったが、地域との関わりの程度が大きくなったのは 2010 年『見えなかった幸せ』(狸小路商店街の協力）からである。その経験を踏まえて、翌年から単なる撮影場所の提供という「協力」ではなく、「地域の人びとと一緒に映画をつくる」こと、「地域と連携して映画をつくること」が目的のひとつとされるようになった。

2011 年『命の樹』では発寒商店街で地域住民に対する説明会を行い、地域の人びとがさまざまな形で制作 WS に参加した。2013 年には、それまでのワークショップの集大成として劇場公開をめざした長編映画『茜色クラリネット』を制作した。琴似商店街を中心とした琴似地区の人びとと制作実行委員会を設立し、琴似地区の人びとは資金調達の役割（助成金への申請）を担った（表 3）（表 4）。

表 3　地域コミュニティの参加

発寒商店街 （2011年）	・ロケ物件（自宅）の提供、エキストラ出演、鉄製組み立て式足場の提供 ・発寒商店街での説明会で街の歴史（屯田兵による開拓）を知った市民が初めて脚本を書き応募→採用される。 ・発寒地区内で樹齢200年以上の木を発見（北海道開拓前からある樹が作品のシンボル）→これがなければ、「木」が出るシーンは別地域で撮影することになっていた
琴似地区 （2013年）	・地域のまちづくり団体とともに「コトニ夢映画制作プロジェクト」実行委員会を設立 ・琴似地区の人々が映画制作のための助成金を申請（北海道共同募金会、太陽財団） ・エキストラ出演、ロケ物件の提供・交渉、スタッフの待機場所の提供 ・「祭り」のシーンは商店街副会長が司会で場を仕切る。実際の祭りが行われているなかで撮影し、その場にいる人たち（約150名）がエキストラの一部として出演。

表４　『茜色クラリネット』制作の経緯

2012年11月	琴似地区の人々と交渉→「コトニ夢映画制作プロジェクト」実行委員会を設立（NPO法人北海道コミュニティシネマ・札幌と「土曜はコトニ」実行委員会を中心に）
2012年12月	プロデューサー、製作スタッフ（大人スタッフ）、予算規模の決定
2013年1月	映画制作についての記者発表。脚本公募（3月15日まで）。1口3000円の市民サポーター募集。
2013年3月	監督の決定（プロデューサーと指導監督が中学生WSの経験者から選出）
	脚本選考会（プロデューサーなど4人の大人スタッフと監督の5名で）
2013年4～5月	脚本直し（指導監督、脚本、監督で）。監督が映画タイトルの決定。
2013年4月	映画タイトル、監督、参加希望者説明会の記者発表。
	参加希望者への説明を実施（50人）。
2013年5月	ロケハン開始。脚本決定稿の完成。公開オーディションと地域説明会。監督と演出チームが役者を選考。
2013年5～6月	ワークショップ開始（本読み、演技指導、技術指導、立ち稽古、ロケハン）
2013年7月	エキストラ募集、地域の関係各所に挨拶（駐車場の確保、昼食の手配などの依頼）、現地リハーサル
2013年7月28日	撮影開始（琴似地区の夏祭りの日）
7月29日、31日	現地リハーサル
8月1～14日	連日撮影（9日のみ雨で撮影中止）
2013年8～11月	編集、アフレコ、追加撮影、完成、完成披露上映会。
2014年3月	ゆうばり国際ファンタスティック映画祭で上映。シアターキノで劇場公開開始。
2014年5月～	道内の映画館など約10か所で上映
2014年11月	東京都渋谷「ユーロスペース」で公開
2015年	国内外8か所（映画祭など）で上映会

図１　『茜色クラリネット』チラシ（ユーロスペース公開時）

芸能

茜色クラリネット 中高生の映画

地域に感謝 撮影終了

スタッフ、キャスト チームワーク 大切さ実感

札幌市西区の琴似地区を舞台に中高生が制作する長編映画「茜色クラリネット」の撮影が終了した。7月下旬から約2週間。地域の協力なしではできなかった撮影に、スタッフやキャストは社会との関わりやチームワークの大切さを実感。クランクアップに喜びの表情を見せた。

最終日の14日は午前6時から琴似神社で、映画に登場するキャラクター「トニ子」との対決シーンなどを撮影。夕方には全てが終了し、プロデューサーの麻生栄一さん(63)らから監督の坂本優乃さん(15)＝札幌北高1年＝に花束が贈られた。自身を「優柔不断な性格」と言っていた坂本さんだが、撮影が進むにつれ、てきぱきと指示できるようになったという。「自分が動かなければ何も進まない。みんなに支えてもらい、自信になった」と振り返った。

坂本さんを支えた演出担当の自田明花さん(14)＝札幌・幌東中3年＝も「自分は積極的な性格じゃない。初めて会うエキストラの方々に小道具を配り、指示するなんてできないと思ったけど、現場のリズムを見て乗り切った。苦手を克服できた」と話す。

約3週間かけ、カット割り用の絵コンテを描いたのは演出担当の松田みつきさん(12)＝札幌・星置中1年＝。「トニ子が夢を食べる場面などを絵で表現するのは難しかった。夜遅くまでかかって絵コンテを描いた」という。カメラを担当した大井沙那さん(13)＝札幌・新琴似中2年＝は「手持ちカメラで車いすを追いかけて撮るのが難しかった」と語った。

撮影に毎日立ち会った麻生さんは「安全面と、人に迷惑をかけないことに一番気を配った。時々叱ったが、子供たちが自ら考え、判断できるようになった」と振り返る。実際、お世話になった店などでスタッフが深々と頭を下げてお礼を言う光景も見られた。中高生らは映画作り以外でも多くを学んだようだ。

9月からは編集などの作業に入る。

（塩野洋）

▶クランクアップで笑顔を見せる中高生のスタッフ、キャストら

図 2　『茜色クラリネット』撮影についての記事（北海道新聞 2013 年 8 月 20 日）

以上のように、札幌市の「子ども映画制作ワークショップ」では、参加する子ども（中学生）が他の参加者や大人スタッフとコミュニケーションを行いながら映画を制作するという「共同作業の体験」を行っているといえる。さらに、地域の人びととも「共同作業」を行うという特徴がある。

次節では、参加者へのアンケート調査の結果を考察していく。

4．「子ども映画制作ワークショップ」参加者へのアンケート調査

4-1.　調査の概要

NPO 法人北海道コミュニティシネマ・札幌の協力を得て、2005 年から行われてきた制作 WS の参加経験者と保護者を対象としてアンケート調査を実施した。調査期間は 2015 年 12 月から 2016 年 2 月で、調査票は郵送にて配布・回収した。対象者数と回収率は表 5 の通りである。本稿では参加者の回答結果を考察する。

表 5　対象者数と回収率

調査対象者	制作WS参加者（100名）
	参加者の保護者（99名）
回収数と回収率	参加者の回答者数:29名（29%）
	保護者の回答者数:30名（30.3%）

表 6 は調査回答者が参加した作品である。複数回の参加者がいるため合計が調査回答者数（29 名）を上回っている。制作 WS 参加回数は 1 回が 17 名、2 回 10 名、3 回 2 名である。

表 6　回答者の参加作品

	回答者数	男	女
僕らの魔法の学校　（2005年）	1	0	1
Page One　（2008年）	4	1	3
夏の自由な研究　（2009年）	6	3	3
見えなかった幸せ　（2010年）	7	3	4
命の樹　（2011年）	6	0	6
僕らの興味期限切れの夏　（2012年）	9	2	7
茜色クラリネット　（2013年）	9	5	4
計	42	14	28

4-2.　ワークショップ参加前の意識

制作 WS への参加については、約 7 割が「自分で決めた」と回答している。制作 WS に参加しようと思った理由については、「映画への関心」、「映画制作への関心」、「共同での創作」、「演じること」への関心が比較的高い。「地域と一緒に映画をつくりたい」（地域との共同）は「ややあてはまる」と「あまりあてはまらない」の二つに分かれている。

「ワークショップに参加する前、どのような不安がありましたか」という質問に対しては、「ワークショップを楽しめるか」という自分自身への不安が見受けられる。一方で、「大人スタッフとの関係」や「地域の人たちとの関係」に関する不安は少なかったことが分かる。約 7 割が「不安はなかった」と答えている。

表 7　ワークショップ参加を決めた経緯

	回答数	%
自分で決めた	20	69
家族に勧められて	9	31
友だちに誘われて	0	0
学校の先生に勧められて	0	0

表 8　ワークショップ参加の理由

	あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
映画をつくりたい	23 82.1%	3	2	0
映画製作を知りたい	17 60.7%	8	1	2
共同での創作への関心	10 35.7%	10 35.7%	6	2
地域との映画づくり	3	12 42.9%	10 35.7%	3
映画が好き	20 71.4%	6	2	0
演じたい	14 50%	5	6	3
演出をやりたい	4	8	11	5
撮影をやりたい	11	7	6	4
録音をやりたい	5	7	8	8
音楽をつくりたい	3	5	13	7
衣装・小道具	3	6	10	9

表 9　ワークショップ参加前の不安

	不安だった	やや不安だった	あまり不安はなかった	不安はなかった
ワークショップを楽しめるか	2	14 50%	4	8
うまくできるか	8	9	7	4
希望の役割か	1	10	6	10
他の参加者との関係	6	8	7	7
大人スタッフとの関係	3	6	11 39.3%	8 28.6%
地域の人との関係	1	4	14 50%	8 28.6%
勉強との両立	0	6	10	12

4-3.　ワークショップでの活動について

表 10　ワークショップで難しかったこと

	難しかった	やや 難しかった	あまり 難しくなかった	難しく なかった
大人スタッフの指導を理解すること	2	7	10	10
自分なりに考えて工夫すること	8	10	8	3
他の参加者と話し合いをすること	1	9	12	7

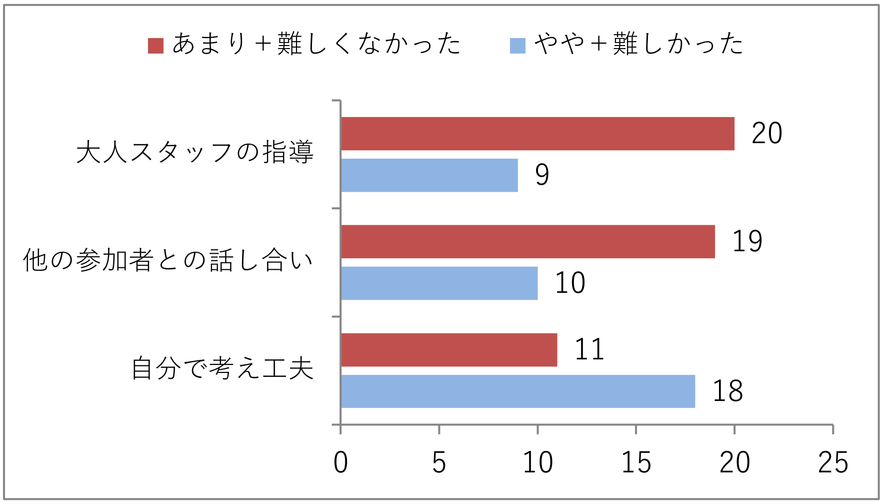

図 3　ワークショップで難しかったこと

制作 WS のなかで「難しかったこと、うまくできなかったこと」については、約 6 割が「自分なりに考えて工夫すること」が「難しかった」と回答した。一方で、「大人スタッフの指導を理解すること」と「他の参加者と話し合いをすること」については、多くの回答者が「難しくなかった」と回答している。

「難しいこと、うまくできなかったことがあったとき、どのようにしましたか」という質問への回答結果を、表 11 と図 4 にまとめた。最も多い回答は「他の参加者と話し合った」27 名（93.1%）だった。

表 10 にあるように「自分なりに考えて工夫すること」が難しいという回答が多いが、難しいことやうまくできないことがあったときに「自分なりに考えて工夫する」参加者が多かったことが分かる。

表 11　難しいことへの対応

	よくした	まあまあした	あまりしなかった	まったくしなかった	無回答
大人スタッフに相談した	6	11	10	1	1
自分なりに考えて工夫した	9	15	5	0	0
他の参加者と話し合った	13	14	1	1	0
家族に相談した	3	6	14	6	0

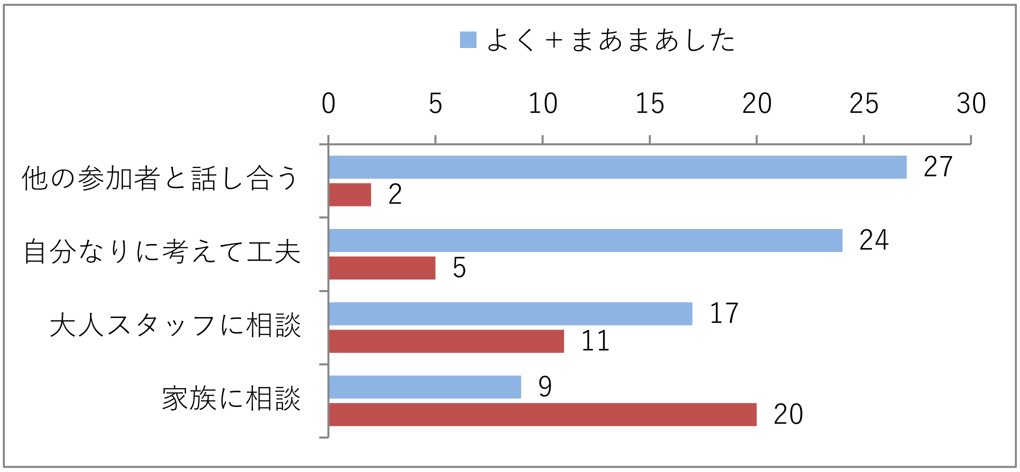

図 4　難しいことへの対応

4-4.　ワークショップで楽しかったこと

「自分で考えて工夫すること」を約 6 割が「難しかった」と回答していた（表 10）。それに対して、難しいことやうまくできないことがあったとき、24 名（82.7%）が「自分なりに考えて工夫」していた（表 11）。そして、26 名（89.7%）が「自分なりに考えて工夫できたこと」が、ワークショップで楽しかったことだと回答している。難しいながらも、多くの参加者が自分なりに考えて工夫して、そしてそのことに楽しさややりがいを感じているといえるだろう。

また、「地域の人と一緒に作業をしたこと」について、23 名（78.4%）が「楽しかった」と答えている。参加理由（表 8）では、地域との共同への関心が約 5 割であったことを考えると、制作 WS での経験を通して、地域との関わりや地域の人びととの「共同作業」に楽しさや面白さを感じるようになったと考えることができる。

表 12　ワークショップで楽しかったこと

	楽しかった	まあ 楽しかった	あまり 楽しくなかった	楽しく なかった	無回答
技術を学んで、うまくできるようになったこと	14	14	1	0	0
自分なりに考えて工夫できたこと	15	11	3	0	0
他の参加者と話し合いをしながら作業をしたこと	21	6	2	0	0
大人スタッフと話し合いをしながら作業をしたこと	17	12	0	0	0
地域の人たちと一緒に作業をしたこと	11	12	4	1	1
街のなかで撮影をしたこと	20	8	1	0	0
映画を完成させたこと	24	5	0	0	0

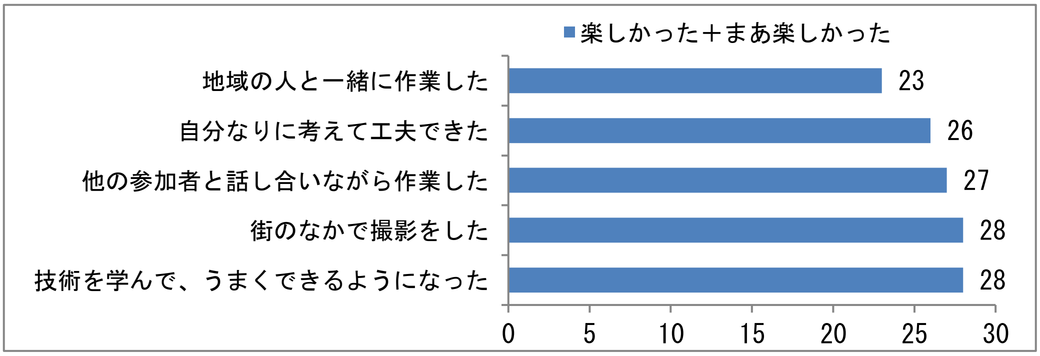

図 5　ワークショップで楽しかったこと

4-5.　他の参加者との関係

参加者の間では、ワークショップについての会話はもちろんのこと、さまざまな話題でコミュニケーションを行っていたことが分かる。自由記述の回答からも、ワークショップの場での他の参加者との会話を楽しんでいたこと、そして他の参加者や大人スタッフとの対話から「学び」を得たと感じていることが分かる。

表 13　他の参加者との会話・関係

	よく話した	まあ話した	あまり話さなかった	まったく話さなかった
ワークショップについて	19	9	1	0
趣味について	18	7	4	0
勉強・学校について	12	12	5	0
将来について	7	14	6	2

表 14　ワークショップでの会話（自由記述から抜粋）

ワークショップに参加した人たちは、子どもも大人もみんな本当にいい人たちで、いつも学校のことや地域のこと、仕事についてなど、たくさんの話をしました。本当に映画の仕事をしているスタッフから実際の仕事のことを教えてもらったり、ワークショップの仲間と公開される映画や好きな映画の話をしたり、地域の大人の皆さんに、地域のことを詳しく教えてもらったりしました。
約7年前のことなので、よく覚えてはいませんが、同時期に参加した仲間とは出身中学の話やどの高校に進学するかというような話をした覚えがあります。私たちが参加していないワークショップの映画も一度観に行き、感想を話した思い出もあります。
ワークショップや撮影の様子、特に楽しかったことや学んだことを、逐一、家族に報告したことが印象に残っています。
他の参加者とはワークショップ以外でも遊びに行くなど、さまざまなことを話した。
前回までのワークショップではこんなことをやったなど先輩からのワークショップの話。
将来、映画製作に関わてみたいと思ったことがあったので、監督や大人スタッフに相談したりした。私たちのことを取材してくれた人に今の日本の映画界について聞いたり、他の参加者と5年たった今でも連絡を取り合っていたりと忘れられないとても良い思い出ができた。
たくさん話をしました。まず映画についてや、習い事、部活など。いつも楽しかったです。将来が楽しみになりました。
将来、映像技術に関する職や、役者関係の仕事に就きたいという話題。高校受験でそのような職業に就ける高校選びについてなど。ワークショップを通じて夢が広がったという会話。
中学校生活があまり楽しいものではなったので、週一回のこの活動がすごく楽しみだった。この活動で仲良かった子の一人が、私の知人とつながっていて、そういうふうに輪が広がっていくのは良いなと思った。普段、なかなか知り合うことができないようなプロの監督さんや地域の人、大学生の方たちと出会えて、本当に良かったと思う。「映画をつくったことがある」という経験は、自分の中で非常に大きなものになった。
当時はまだ中学生で自分の地元の友達しか知らない世界にいたが、札幌市という大きな世界でさまざまな人格の人と触れ合えて考え方が変わった。学校の悩みは学校の友人には相談しにくいが、全くつながりのない友人だからこそ話せることもあった。もしまたこのようなワークショップを開催することがあれば、次は経験者として大人スタッフにもなってみたい。

4-6.　地域の人びととの共同について

表 15 は「地域の大人の人たちと一緒に映画を制作してみて、どのように思いましたか」という質問の回答結果である。「地域の大人の人と関わるのは難しかった」に対して「そう思わない」（「あまりそう思わない」＋「そう思わない」）と 20 名が答えている。そして、「面白かった」25 名、「楽しかった」24 名、「熱意を感じた」23 名である。

「難しさ」よりも、地域の大人の熱意を感じ、地域の人たちと「共同作業」を行うことに面白さを感じていたといえる。

表 15　地域との共同についての感想

	そう思う	やや そう思う	あまりそう 思わない	そう 思わない	無回答
地域の大人の人たちと関わるのは難しかった	1	7	14	6	1
地域の大人の人たちと関わるのは楽しかった	12	12	3	1	1
地域の大人の人たちの熱意を感じた	11	12	4	1	1
地域のいろんな人たちと一緒に製作するのが面白かった	15	10	3	0	1
子どもたちだけではなく地域で一緒に制作するほうが面白い	13	9	5	1	1

図 6 は「地域の人たちと一緒に、街なかで撮影することで、どのようなことに気づいたと思いますか」という質問の回答結果である。「地域の人たちと一緒に」映画を制作することで、地域の人、場所、歴史、それまで知らなかった街の姿に対する気づき・発見があったことが分かる。

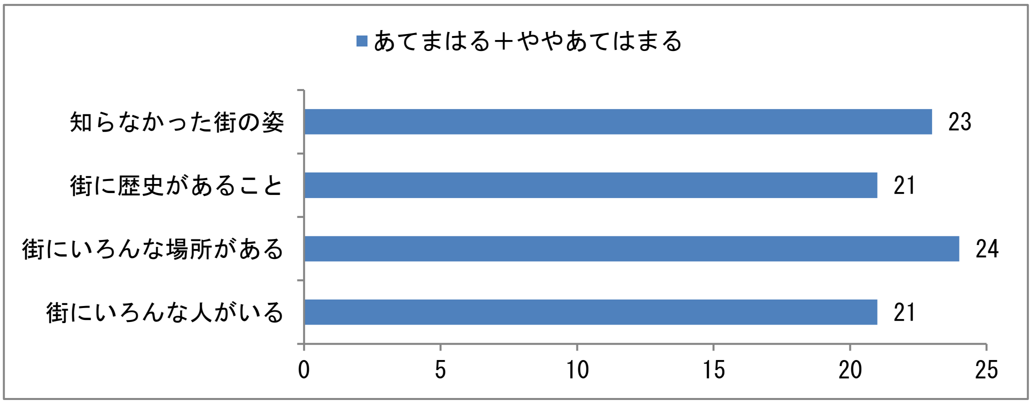

図 6　地域との共同で気づいたこと

4-7.　ワークショップ後のことについて

ワークショップ参加後の「創作活動」についての回答結果から、実際の行動（参加）への影響はあまり見られないが、「今後、参加してみたい」という回答が多く、創作活動への「関心・興味」がある程度高められているといえる（表 16）。

「鑑賞行動」については、ワークショップ参加前と参加後で大きな変化は見られない（表 17）。

表 16　ワークショップ参加後の創作活動について

	参加したことがある	今後、参加してみたい	興味がない
他の映画制作ワークショップ	0	23	6
博物館・美術館でのワークショップ	1	13	15
映画・映像制作の活動（部活動やサークル）	2	23	4
演劇・美術制作の活動（部活動やサークル）	9	11	9

表 17　ワークショップ前後の鑑賞行動（カッコ内の数値は参加前）

	よくする	まあする	あまりしない	まったくしない
家で映画を見る	17（14）	8（10）	4（4）	0（1）
映画館で映画を見る	14（13）	9（10）	6（5）	0（1）
映画祭に行く	2（0）	9（3）	8（7）	10（19）
コンサートやライブで音楽を聴く	7（5）	5（6）	8（6）	9（12）
演劇を見に行く	8（6）	7（8）	6（8）	8（7）
博物館・美術館に行く	4（4）	9（7）	8（10）	8（8）
芸術祭に行く	3（2）	7（6）	6（9）	13（12）
地域のお祭り・イベントに行く	6（9）	11（11）	9（6）	3（3）

表 18　ワークショップ後の変化

	あてはまる	あてはまらない
映画が好きになった	25	4
創作することに興味を持つようになった	26	3
積極的になった	17	12
社交的になった	17	12
目標を持つことができた	17	12
目標を持ちたいと思うようになった	20	9
初対面の人でも話ができるようになった	19	10
大人の人と話ができるようになった	20	9
自分が住む地域・街に関心を持つようになった	18	11

表 18 は「ワークショップに参加してみて、あなた自身はどのように変わったと思いますか」という質問の回答結果である。

ワークショップへの参加によって、実際の行動（「創作活動」や「鑑賞行動」）への影響はあまり見られなかったが、しかし「創作への関心」と「映画への関心」、そして「目標を持ちたい」という気持ちにはある程度影響があったことが分かる。

地域との共同作業を通して、地域に対する「気づき」を得ていたし（表 16）、それに加えて、約 6 割が「地域・街に関心を持つようになった」と答えている（表 18）。

4-8.　ワークショップの感想

制作 WS の満足度は全体的に高い。図 7 の数値は「そう思う」と「ややそう思う」の回答数を足し合わせたものである。「あまりそう思わない」の回答はあるが、「そう思わない」の回答はなかった。

自分で考えることに「難しさ」を感じていたし（表 10）、参加前には「地域との共同作業」に関心がなかった人が多かった（表 8）。ワークショップを通して、「共同で制作することの面白さ」を知り、「自分で考えて工夫すること」ができるようになり、そして「地域の人との映画制作」を面白いと感じるようになったといえる。

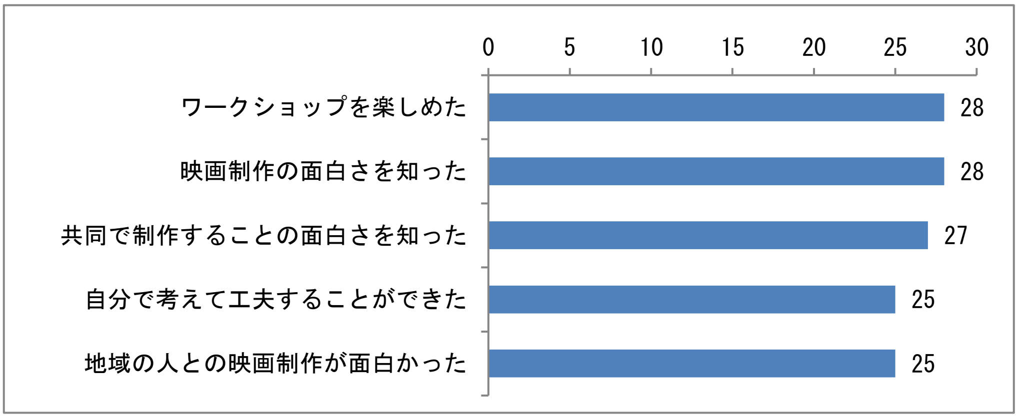

図 7　ワークショップの感想

5．考察

5-1.　映画教育と制作 WS

以上で見てきたように、「子ども映画制作ワークショップ」の参加者は、他の参加者・大人スタッフ・地域の人びとと「対話」を行い、他者とともに考えるという「共同作業の体験」をしていたといえる。

札幌市の制作 WS には「地域の人びとと共同で制作する」という特徴がある。地域の人びとと一緒に映画を制作することで、参加者は、地域のさまざまなことへの気づき・発見を得てい

た。また、「地域の人びととの共同」に楽しさ・面白さを感じており、さらには「地域・街に関心を持つように」なっていた。

子どもを対象とする映画教育では主に、映画による情操教育、メディアリテラシー教育、将来の観客の創造、豊かな想像力・創造力、共同作業によるコミュニケーション能力の育成が目的とされる。本稿の調査結果では、創作活動・鑑賞行動の実際の行動（参加）への影響はあまり見られなかったが、創作活動への「関心・興味」に対してはある程度の影響があったといえる。

「情操教育」「メディアリテラシー教育」「将来の観客の創造」「豊かな想像力・創造力」は1回のワークショップの効果として把握することは難しいと考える。これらは、継続的・中長期的な取り組みの目的として捉える必要があるのではないかと考えたため、アンケート調査の項目に含めていない[11]。

さらに、コミュニケーション「能力」がどれくらい育成されたのかということを把握することも簡単ではない。子どもたちは、一般的に、家庭や学校などさまざまな場で、さまざまな人びととコミュニケーションを行い、社会化されていく。あるひとつの「場」（ここでは制作WS）だけを取り上げて、それが参加者のコミュニケーションの「能力」にどのような影響を与えるのかを検証することは困難であると思われる[12]。コミュニケーション「能力」への影響は分からないが、しかしながら、制作WSが「コミュニケーションの場」となったことは明らかである。それは、学校や家庭以外のコミュニケーションの「場」である（表14を参照）。学校・家庭以外での人間関係を形成することができる、同年代以外の人たち（大人スタッフ、地域の人びと）とのコミュニケーションを行うことができる「場」という役割を、制作WSが担っていたと考える。

制作WSの参加者は、ある程度、映画や創作に関心を共有している。関心を共有する人たちと「対話」することで、同じ関心の対象（映画や創作）に対する他者の視点を知ることができる。自分と違う視点を知ることで、自分の関心を多角的に考えることができ、自分の関心をさらに深めることができるだろう。

札幌市の「子ども映画制作ワークショップ」の成果をまとめる。まず、参加者に「共同作業の体験」をもたらした。つぎに、学校・家庭以外の「コミュニケーションの場」となっていた。そして、地域の人たちと「対話」「共同」することで、参加者に「地域への関心」が生まれていた。最後に、創作活動には影響が見られなかったが、創作への関心・興味が醸成されていた。

5-2.　子どもを対象とする映画教育の可能性について

子どもを対象とする映画教育は、映画の普及活動として捉えることができると考える。芸術を地域や市民に普及する活動は「アウトリーチ」活動と呼ばれることがある。「アウトリーチ」という言葉にはそもそも「手を伸ばす」という意味がある。「このことから転じて、文化施設や芸術団体では、日頃、芸術や文化に触れる機会の少ない市民や地域に対して働きかけ、芸術を提供していくことを、広くアウトリーチ活動と呼んでいる」（吉本、2001年、p.2）。

文化施設や芸術団体によるアウトリーチ活動はさまざまな分野で行われているが、そのなかでも最も多いのは学校を対象とした活動である。音楽・映画を鑑賞したり、アーティストが学校に出向いて子どもたちと音楽を演奏したり、演劇のワークショップをしたり、芸術を活用した教育活動として実施されている。教育的な効果について検証が行われることは少ないが、文化経済学会〈日本〉編（2016）でアウトリーチ活動に参加した教師（約 230 名）と児童・生徒（約 2600 名）に対するアンケート調査結果が紹介されている。

> 教師に対するアンケート調査では、アーティストが学校に出向いて行う授業が、子どもたちの感受性、表現力、想像力、コミュニケーション能力、創造力などを育成することに効果がある、と多くの教師が回答している。／また、児童・生徒へのアンケート調査では、そうした授業を継続した場合、3 人に 1 人が「いままでよりも、自分のすることや言うことに自信をもてると思う」と回答している点が注目できる。（文化経済学会〈日本〉編、2016 年、p.328）

「いままでよりも、自分のすることや言うことに自信をもてると思う」という回答は、自信や自己肯定感を持てるようになったと理解できるだろう。芸術のアウトリーチ活動は、文化芸術に関わるものにとどまらず､幅広い効果をもたらす可能性があるといえる｡札幌市の制作 WS でも、多くの参加者が、ワークショップ後の変化として「目標を持つことができた」や「目標を持ちたいと思うようになった」と回答している。

子どもを対象とする映画教育を芸術のアウトリーチ活動のひとつとして位置づけることができるし、アウトリーチと同じように幅広い教育効果を期待することができるのではないだろうか。

これは中長期的な目的である。本稿は、札幌市の制作 WS の成果から、映画教育に短期的な目的・成果を追加したい。それは、映画制作ワークショップが「地域との関わりの場」「地域の人びととのコミュニケーションの場」となることで、参加者が「地域への関心」を持つようになるということである。

「こども映画教室」は地域の映画館と連携してワークショップを行うことがある [13]。また、地域の映画館が独自に子ども向けのワークショップを行うこともある [14]。地方の小規模独立系映画館（いわゆる「ミニシアター」）が、映画の「アウトリーチ活動」において、どのような取り組みをおこなっているのか、そしてどのような成果を生み出しているのか。これらのことを考察し、映画教育における映画館の役割を検討していくことを今後の課題としたい。

註

1 本稿で「映画教育」とは、映画を教える（芸術教育、メディアリテラシー教育）、映画を使って教える（社会教育、情操教育など）、映画づくりを教える（映画制作、工作など）を含めて広い意味で捉える。

2 「ゾーエトロープ」は連続写真（絵）を並べ円筒状にしたものを回転させ、それをスリットから見ると絵が動いて見える装置。

3 国際文化交流推進協会（2007）では工作や制作ワークショップを「体験型」としているが、本稿では土田編（2014）に倣って「表現型」とする。

4 「KAWASKI しんゆり映画祭」のウェブサイトを参照（https://www.main.siff.jp/junior)。最終閲覧日：2023 年 11 月 23 日。

5 以下、「こども映画教室」の内容については、「こども映画教室」のウェブサイトを参照した（https://www.kodomoeiga.com/)。最終閲覧日：2023 年 11 月 23 日。

6 これまで特別講師を務めた主な映画監督には、中江裕司、砂田麻美、伊月肇、諏訪敦彦、是枝裕和らがいる。

7 「こども映画教室」と共同で（あるいは単独で）、地方の小規模映画館（いわゆる「ミニシアター」）で「映画ワークショップ」（鑑賞・表現）が行われるようになっている。これは、潜在的な映画観客を創造しようとする「アウトリーチ」型の取組みであろうと考える。このことについては、本稿のまとめの部分で取り上げたい。

8 2023 年の「TIFF ティーンズ映画教室 2023」については東京国際映画祭のウェブサイトで紹介されている。https://2023.tiff-jp.net/ja/lineup/film/3608YUT05（最終閲覧日：2023 年 11 月 27 日）。

9 以下、制作 WS の情報については NPO 法人北海道コミュニティシネマ・札幌の代表へのインタビュー調査（2015 年 7 月 30 日）で得られた情報に基づいている。インタビュー調査は 2015 年 7 月 30 日に実施した。NPO 法人のウェブサイトにも制作 WS の情報が掲載されている（https://www.theaterkino.net/npo.html、最終閲覧日：2023 年 11 月 28 日）。

10 2013 年の『茜色クラリネット』のみ大人スタッフが制作 WS 参加経験者から監督を選考した（高校 1 年生)。劇場公開をめざした長編作品であるため、経験者を監督に選んだという。

11 岡田（2009、p.13）は、芸術の嗜好・好みは「これまでどういう本（音楽）に囲まれてきたのか。どのような価値観をどこから植えつけられてきたか。それについて、どういう人々から、どういうことを吹き込まれてきたのか」という履歴によって規定されると述べる。映画に関する嗜好（「将来の観客の創造」）や映像によって表現したいという関心（「豊かな想像力・想像力」）も、どのような映像に囲まれてきたのか、どのような価値観や考えをそこから植えつけられてきたのか、それとともにどういう人々と関わってきたのかという履歴によって影響を受けるのではないだろうか。映像制作ワークショップは、このような履歴を形成するひとつの経験であろう。映画の嗜好や想像力・創造力がどのように育成されるのかを理解するためには、１回の経験だけではなく履歴の全体あるいは履歴の形成過程を考察する必要があるのではないかと考える。

12 コミュニケーション「能力」の定義次第で測定することは可能かもしれないが、本稿の直接的な関心ではないため、ここでは行わない。

13 例えば最近では、長野県上田市の「上田映劇」で「こども映画教室」による映画鑑賞・制作ワークショップが行われた（2022 年 11 月)。「うえだ子どもシネマクラブ」のウェブサイトを参照（https://uedakodomocinema.localinfo.jp/posts/37944677?categoryIds=3470015、最終閲覧日：2023 年 12 月 4 日)。

14 例えば広島県尾道市の「シネマ尾道」が、フィルムを傷つけたり、フィルムに直接絵を描いたりする「シネカリグラフィー」のワークショップを行っている（対象は小学生、2022 年 12 月）。シネマ尾道のウェブサイトを参照（http://cinemaonomichi.com/category/%E3%83%AF%E3%83%BC%E3%82%AF%E3%82%B7%E3%83%A7%E3%83%83%E3%83%97/、最終閲覧日：2023 年 12 月 4 日）。

引用文献

文化経済学会〈日本〉編、2016 年『文化経済学：軌跡と展望』ミネルヴァ書房。

石垣尚志、2016 年『「子ども映画制作ワークショップ」参加者・保護者アンケート調査報告書』。

国際文化交流推進協会、2005 年『諸外国及びわが国における「映画教育」に関する調査中間報告書』。

国際文化交流推進協会、2007 年『「こどもと映画」プログラムの現在－諸外国及びわが国における「映画教育」に関する調査　実践編報告書』。

岡田暁生、2009 年『音楽の聴き方：聴く型と趣味を語る言葉』中央公論新社。

土田環編、2014 年『こども映画教室のすすめ』春秋社。

吉本光宏、2001 年「アートと市民・子どもをつなぐ「アウトリーチ活動」：芸術による社会サービスの可能性」『ニッセイ基礎研究所 REPORT』2001 年 9 月 25 日、pp.2～7。